

---

# 神様と同棲生活始めました

扉。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様と同棲生活始めました

### 【Nコード】

N3807BA

### 【作者名】

扉。

### 【あらすじ】

自称普通少年 新垣 和麻はある日、親友と願いが叶う神社へ参拝しに行くことになった。

参拝後、何気なく自宅へ帰るとそこには自称神様がいた。

さっそく、願い事叶いませんでした神様……。

和麻が送るハーレム？ コメディー！。

## キャラ紹介（前書き）

神様と同棲をセツトに考えたお話です。

気に入っていただけたら、お気に入り登録お願いします。

## キャラ紹介

あらがき  
新垣 悠 ゆう

年齢 15歳

職業 高校2年生

誕生日 12/23日

身長 170cm未満 (詳しくは不明)

### 概要――

黒髪に少し長め、瞳は黒く、顔が少し幼いとよく言われる。

恋愛感情はそれ程無く、他人の気持ちに気づかない。

両親は4年ほど前に新婚旅行へ行くと言って海外へ

同時期に妹が自分と住むのは嫌だと言って祖父母の所へ

3

小学5年の頃、事故が原因で一週間眠り続ける。

意識を取り戻した後、しばらく部分記憶喪失になっていたらしい。

人にやさしく、誰にでも平等を心掛けている。

手先が器用な為、料理などが得意。

日和 ひより  
日向 ひなた

年齢 16歳

職業 神様 高校2年生

誕生日 不明

身長 150cmに限りなく近い140cm代

## 概要

黒髪のロング、綺麗な髪をしている。  
神様。

政略結婚が嫌で家出をしてきた所、悠に出会い一目惚れをする。  
どうにかして近づこうと考えていたら神社に願いを言い来た為、お  
邪魔することに。

見た目らしく、元気で無邪気

料理をすれば、炎上。

洗濯をすれば、洗剤の分量を間違える。

掃除をすれば、物を壊すなどと言った結構なドジっ娘属性がある。

第1話 人生の転機って急に来ると思う (前書き)

新連載です!!

感想、誤字脱字、評価、などお願いします。

## 第1話 人生の転機って急に来ると思う

みなさんは神様と言う存在を信じるであろうか？

俺は信じている。

神様って存在自体より、奇跡と言う単体を信じている。

奇跡は神様が起こしたものだ俺は思っている。

俺は小学5年の頃、事故に会い、死ぬほど痛い思いをした。

一週間眠り続け、ひと時は死を感じた事もあったと言う。

だから、俺はこうして今生きていることが奇跡だと思う。

いや、神様が起こしてくれた気まぐれかもしれない。

それでもいいと思っっている。

俺、あらがき新垣 ゆう悠はどこにでもいる普通の高校生だ。  
自称ではないと思う。

日本特有の黒い髪に少し長め、瞳は黒く まあ普通だ。

男子高校2年の平均身長、170cmを大幅に下回り、少し顔が  
若々しいとよく言われる。

と、まあ在り来たりな自己紹介はこの辺にしておこう。

「悠……お前、何1人でブツブツ言ってるんだ？」

「え？ 聞こえてた？」

「ああ、『自称ではないと思う』って所から」

「なら、もっと早く行ってくれよ。俺、超恥ずかしい人じゃねえかよ」

「ま、いんじゃない？」

「いいけどさ」

俺と話しているこいつは、しんじょう 楓新庄 楓

実に女らしい名前だが、男である。

しかも、イケメンである。

俺と同じクラスで中学時代からの悪友だ。

髪は高校に入ってから茶色に染め、一段とイケメンらしさを上げて  
いる。

悔しいが、イケメンだ。

そして、一番許しがたい事は彼女持ちということであった。

イケメンになりたての楓が入学初日に出会った女の子に一目惚れ、  
そのまま告白をして、今日までに至っている。

と、いう事でつい先日付き合って1年を迎えたらしい。

許しがたいが事実だ。

ああ、リア充は死んでもらいたい物だ。

リア充は爆発しろとよく言うが、それなら自分の両親なども十分  
リア充なはずなので、死ぬのだが、そんな両親を平気で殺そうとす  
る発言をする奴はどうかしているぜっ！！

「いいよな。彼女持ちは」

「なんだよ、唐突に自分で内心をズタズタに引き裂いているセリフメンタル

「は」

「お願いだよ、カエでもん。俺に春をください」

「春なら1ヶ月ほど前に終わりました。今は梅雨です」

「そう言う、春じゃねえよ!」

「……お前は、どうしてそんなに鈍いのかな」

俺の隣を歩く楓がボソツと呟いた。

俺は首を傾けると

「なんか言ったか?」

「んや。何も言ってねえっすよ」

これ以上追及しても答えられそうになかったため、俺は素直に諦めた。

ここは人通りは少なく、車なんて一週間に1度見るくらいだ。

「つてか、どこ行こうとしてんだよ。こんな奥まで来て」

「あ? 言ってなかったっけ」

「言ってねえよ。言ったら100% こんなやべえ所来ないわ!」

「ヤバいつて言うなよ。一応、神聖な場所なんだから」

「神聖!?!」

「そうだ。ほら、見えたぞ」

楓が指を指した先にあったものは、薄暗い夜道には不慣れな神社だった。

社が立つ本道まで俺は止まる。

「なんだよ楓。もしかして、人殺したのか?」

「殺してねえよ!?! なんて、こんな所に来てそんな推理になる」

「だって、こんな暗い神社　　はっ!?!」

俺はポンツと手を叩いた。

楓は『どうせ違うんだろっな』と言う表情で呆れ果てていた。

「今から、殺すのか」

「ちげえよ！！ 殺す以外で考えろつてえの！」

「うーん。ちよつと、思いつかないな」

「思いつかねえのかよ。だったら、教えてやる」

「え？ ネットバレはやっ！！」

「早くねえよ。ここに来てもう20分は経つわ。俺は報われないお前、(の事を好きだと言っている奴ら)に救済をだな 与えよう  
と思っっているのだよ」

「・・・お前」

俺は楓の肩に手を乗せる。

「いや、そんなキャラに合わないことしなくていいから」

「そんなこと言ってんじゃねえええ！！」

暗い神社で楓は叫んだ。

ああ、これは絶対に通報されるなと心の中で思いながら、俺達は  
本殿へと進む。

願い事が結構叶うと噂の神社だった。

まあ、一部のマニアにだけ。

どうやら、それを知った楓は1年の頃にここに来て『彼女が欲しい』と願ったらしい。

その翌日、運命的な出会いを果たしたと言う。

なら、もっと早く教えねえんだよ!!!

と、楓にぐちぐち言いながら俺は本殿へと着いた。

「知ってるか？ 神社には決まりごとが合って

「二礼二拍手一礼」

「・・・知ってたのかよ」

「一般常識だ」

俺は無言で二礼二拍手一礼をして、願い事を心の中で言う。

『平穏な、毎日が得られますように』

え？ そこは彼女が欲しいじゃないの？ と思っっている奴ら!!  
彼女つてのは自分の手で手に入れるもんだ、人の手を借りるなんてもってのほか。

へっ。俺は隣にいる奴とはちげえんだよ!!!

「今、俺の事を悪く言っただろ」

「言っていない」

俺は手を横に振る。

そして、お賽銭を投げるべくポケットに手を入れた。

手に取った金額は3円

・・・あれ？　こんなにすくねえんだ？

あ、そうか。ここに来る前にマク寄ったもんな。

マツ　って以外に金掛かるからな。

「さて、帰るとしますか」

「そうだな、もう暗いし」

「まあ、明日が土曜日で助かったよ。これなら、昏過ぎまで寝てられるし」

「いいな、文科系の部活は。俺、運動部止めてえよ」

「そんな休日休めないくらいで休むと思うなよ。頑張れよ未来のエンジニアさん」

俺はそう言うと、楓と共にこの神社を後にした。

今日の夕食と明日の朝食をコンビニで買って、家へ着く。

ちなみに、両親は現在、新婚旅行中だ。

今年で結婚生活17年目なのに。

兄妹は妹1人。

しかし、どうやら俺の事があまり好きでないらしく、母方が父方

かは忘れたが両親どちらかの祖父母にお世話になっている始末であった。

「ただいまあ」

「おかえりなさい」

あれ……今、誰かの声が聞こえたような気がしたけど。

錯覚？ いや、この場合幻聴か。

ドアを開けると驚いた、見た目少女……いや幼女がいた。

「……」

「あ、おかえり！！」

「……誰？」

「え？ それ聞きますか？」

「いや、聞くに決まってるでしょ」

「そうですね……おほん……私は日和 ひよりひなた 日向ですっ！！」

日和 日向と名乗った少女。

黒髪の女の子だった。

背丈は低く、どう見ても小学生の背丈だ。

「いや……ちょっと待って。日向ちゃん」

「はい。なんでしょうか？」

「率直に言います。何故、家にいるんですか」

すると、日向ちゃんはスレンダーな胸を張って自慢げに言った。

「君の願い叶えに来ました」

・・・はい？

どうやら、俺の願いは一切届いていなかったらしい。

俺の脳は面積量のデータが入ったため、意識が途切れ、その場に倒れこんだ。

第2話 自称神様を名乗る少女（前書き）

感想、誤字脱字、評価お願いします。

## 第2話 自称神様を名乗る少女

「……んあ？」

目を開けると、蛍光灯の光が眩しすぎたのか手で顔を覆った。

あれ・・・俺なんで、寝てたんだっけ？

酒でも飲んだのか？

いや、俺未成年だし。酒なんて買える年齢じゃねえよな。

じゃあ、なんで・・・

次第に意識がはつきりしていき、起き上がると同時に全てを思い出した。

「あ、なんか少女がいたんだ」

しかし、辺りを見渡す限りそんな人はいない。

もしかして夢でも見てたのか？

なんて、具体的な夢だこんちくしょー。

「そうだ、夢だ夢。早く風呂入って寝よつと」

俺は頭を掻きながら、洗面所へと向かう。

ガラガラ

洗面所を開けると、そこには先ほど夢に出て来た少女がいた。

白い肌に黒い湿った髪の毛。

結果、全体的になんか、えろい。

しばらくの沈黙。

俺は無言でその場を去った。

知らない、知らない。これもまだ夢の中に違いない。

絶対にそうだ。

そうに違いない。

洗面所から悲鳴的な物が聞こえたが俺は幻聴だと言い張ってその場を去った。

「すみませんでした。まず、これだけは言わせてください」

俺は土下座をしていた。

いや、理由は何となく想像がつくだろう。

まあ、その辺は察してくれ。

「まあ……今回は許してあげましょう……」

ってか、何で俺の家に居るのかを聞きたい。

あれは夢じゃなかったのかよ。

「日向ちゃんは何故、俺の家に居る？」

「だから、さつきも言ったじゃないですか。君の願いを叶える為ですよ」

「いや、その願いつてのがわからないから」

「今日、願ったでしょ？ 得能神社で」

「得能神社・・・」

ああ、あのインチキ臭い神社でか。

いや、俺は女の子と同棲したいって願いなんて言っていないんだけどなあ

「俺、女の子と同棲したいって願ってないんだけど」

「そうですね。君は『平穏な毎日を送れますように』でしたっけ？

その願いは無効ですよ」

にこつと悪魔の微笑みつぱい笑みを浮かべた日向ちゃん。

こわ。

「君は賽銭をケチってくれたので逆の願いを叶えることにしました」

「理不尽だああ！！」

「逆と言うのは『平穏でない毎日』になっちゃいますね。手始めに私がやってきたということですよ」

「・・・マジかよ。賽銭1つでこんなことになるとは」

こんなことなら、ツク買わなければよかった……。

いや待て、今から賽銭を上げれば助かるんじゃないのか？

「あ・・・」

「はい。なんででしょうか？」

「今から、賽銭を支払うと言う選択肢は・・・」

「ないですね」  
「・・・即答かよ」

俺はソフアアで少し考え込むと日向ちゃんはノリノリでわくわくとしていた。

お泊り会かよー！

「断ったらどうなりますか」

「断ったら、殺しますっ！！」

残酷な言葉を楽しそうにいいやがった。

俺は諦めが付いた。

どうせ、1人暮らしだし、誰かいた方が面白くなりそうだし。

「まあ、住むのには賛成した」

「ホントですか！！ やったー！！」

「ただし、俺は一端の男子高校生だぞ？ 変な気を起こすかもしれ

ん

「そ、それは・・・きゃ／／／／／／」

急に悶え始める日向ちゃん。

「はあ…………はあ…………。そ、その辺については大丈夫です！！」

ぐっ！ と、親指を立てて日向ちゃんは言った。

俺は何が大丈夫なのか心配になったが、その辺を訊くとまた長い話になりそうなので止めておこう。

「じゃあ、これからよろしく。自称神様」

「私は自称じゃありません！！ 本物の神様です！！」

日向ちゃんは頬をぷくーを膨らませて怒った。  
その表情も、とても可愛いかったのは言わないでおこう。

こうして、神様との同棲生活が始まった

なんやかんやあつて翌日の土曜日となった。

俺は1日中寝ているつもりだったのだが、急ぎよ予定を変更して朝早くから起きていた。

「今日は、どんなご予定で？」

「今日は日向ちゃんに必要な物を揃えに行こうと思ってさ」

「簡単に言つとデートですね」

「……んまあ、そんな風な捉え方もあるっちゃあるね」

「デートですかー。私初めてですよ！！ 悠くんは初めてですか？」

「そうだな……初めてって言うておいた方がいいかもね」

「……？ まあ、お互い初めて同士ということでLet's Goですー！！」

「はいはい」

俺は日向ちゃんに手を取られながら買い物へ出かけた。

### 第3話 神様っていつても人間と同じナリしてんだな

黒のカットシャツにジーパンを穿いている俺。

対して日向ちゃんは、純白のワンピース姿である。

なんでも、洋服は自分で想像して作ることが可能らしい。

先ほど見せて貰った。

そこで俺は、やっと日向ちゃんが神様だと認識した。

凄かった。

ってか、こんなあどけない少女なのに凄く似合っている。

日向ちゃんは鼻唄を歌いながら隣で嬉しそうに歩いている。

俺は隣でその光景を見ていた。

傍から見れば、兄妹に見えなくもないがなんせ周囲の視線が痛い。  
なに？ 俺、ロリコンじゃありませんよ？

この子は神ですからきつと何千年も生きているんでしょー！！

「なあ、日向ちゃん」

「はい。なんでしょう悠くん」

何故か、俺は『くん』で呼ばれている。

まあ、どっちでもいいけれど。

「日向ちゃんって何歳？ 神様だから数千歳とか生きてるの？」

「いえ、私は神様の中でも位の低い者ですから、年齢は……15歳  
ですかね」

「……同い歳とは思えない」

「何か言いましたか？」

にこつと頬笑んでくる日向ちゃん。

しかし、俺は知っていた。

背後にドス黒いオーラが立ち昇っていることに。

「い、いや。なんでもないよ。ほら、最初は何を買うのか決めたの？」

「はい！！ 最初は家具とか日常的に必須だと思います。主に下g」

「わかった、その辺で口閉じとけ。俺が無理やり言わせている空気になってるから」

俺は日向ちゃんの口を塞いでにや笑しながらこの場を去った。

日向ちゃんの頬は少し赤かったのだが、まあ特に気にすることはないだろう。

風邪でも引いている様子はないし。

と、いうことでまずは家具屋へ行ってみよ。

「はぁ・・・疲れた」

俺はデパート内の近くのイスに腰を掛ける。

両手には袋が何個も掴んである。

日向ちゃん・・・買いすぎだよ。

「しかし、あれは危なかった。もう少しで犯罪者になる所だった」と、いつものも日向ちゃんが手を引いて行ってたどり着いた先が下着売り場だった。

その後、すぐ日向ちゃんがどこかに消えて警備員さんまで来たよ。もう絶対、このデパート来れないや。  
天井をふと見上げると左頬に冷たい感触が。

「つめたッ!？」

「えへへ、どうですか。驚きましたか？」

「日向ちゃん。驚いたよってかまず途中で逃げないでもらいたい。俺が犯罪者になる」

「そうですね。悠くんが犯罪者になると私も困ります」

「だろ？」

「帰る所がありません」

「帰る場所の問題!？」

日向ちゃんから貰った缶を受け取り、一口飲む。  
隣に日向ちゃんが座った。

「それにしても、どうして日向ちゃんは俺、なんかの所に来たんだ?」

「……物騒なこと言いますね恭夜くんは」

「まあ、実際そんな感じでしょ」

「そうですねえ。まあ、簡単に言つと逃げ出してきたんですよ、家出です」

「家出?」

「はい。私、位の低い身分ですがこんなナリをしていますので結構

モテたんですよ」

「へえ、ちつちえのにな」

「まあ、そんな感じで色々な人から求婚を求められたんですよ」

「いいじゃん。良い展開じゃん」

「それがそもいなくて。神様の中でも貴族に分類される人が求婚に来たんですよ。それで父は自分達の身分を少しでも上げる為に私を差し出した」

日向ちゃんは変わらない表情で普通に残酷な事を言う。

俺は黙って聞いた。

「だから、私は失望した。親に身分に神と言う存在にな時です。秀くんを見たのは」

「そこで俺の登場!？」

「はい。あれは2カ月前でしたかね。たまたま見て、この人はなんて自由に生きているんでしょうって思いました」

「まあ、自由に生きているっちゃあ生きているな」

「だから、私は隙を見て逃げ出そうと考えました」

「いや、ちよつと待って。今の文から急展開すぎない?」

「細かいことは気にしないでください。それで昨日、丁度あの神社で休んでいた所に現れたということですよ」

「そういう事が・・・」

俺はジュースを一気に飲むと、近くにあつた籠に投げる。

手をパンパンと払って立ち上がると、俺は日向ちゃんの髪を撫でた。

「俺は人の過去に干渉しないタイプだ。どんな過去であろうが今が楽しければそれでいい。だから、気にすんな」

「悠くん・・・」

「さて、帰るとしましょうか。さっきから警備員の目が厳しいから俺の周りには周囲を取り囲むように警備員が配置されていた。見えるだけでも5人。俺ってそんなに犯罪者になるタイプですか？」

「そうですね。いきましよう」

日向ちゃんは笑顔で立ち上がった。  
俺と日向ちゃんは手を繋いでデパートを後にした。

デパートを後にした俺達は昼食を食べていないことに気づき、近くのファミレスに足を運んだ。

「こ、これがファミレスですか!?!」

「初めてか？」

「はい!?! 一度は来たいと思っていました!?!」

目をキラキラと輝かせて店中を凝視する日向ちゃん。  
店員さんがやって来て、近くの席へと案内される。

「さて、日向ちゃんは何が食べたい？ ここは俺が奢るから」

「そうですねえ、やっぱりこれがいいです!!」

「……ケーキ？」

「はい。私、ケーキ初めてなんですよ」

「向こうには無いんだ」

「はい。だから、とつても気になっていました。この白いふわふわな生クリームと」

そこから10分近く語っている日向ちゃんの姿はとても元気はつらつとしていた。

昼食を食べ終えた俺達は家へと歩いていく。

両手には買い物袋が合って、日向ちゃんはルンルンとスキップしながら歩いていった。

「楽しそうだね」

「はい!! こんなに楽しい日は生まれて初めてでした!!」

「それはよかった」

「また　また、デートしましょうね」

「そうだな」

日向ちゃんはニコツと笑顔を見せて、赤く染まった夕日へと走って行った。

俺は買った物を落とさないように、追いかけて行った。

明日は1日中寝るとしますかな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3807ba/>

---

神様と同棲生活始めました

2012年1月10日00時53分発行